

どれみなのはなし

そのさん



きんどんてい にゃんこう

金井亭 猫好

もくじ

あきのいちにち	3	
あきのいちにち	のこと	9
ピーマン・だんす	10	
ピーマン・だんす	のこと	26
あとがき	27	

まえがき

おひさしぶり　の方は少ないとは思いますが
 TVアニメ『おジャ魔女どれみ』の本その3です。
 あいかわらず恥ずかしい話ばかりの上、登場人物
 がかなり片寄ってます。肌にあう方は少ないかもしれ
 ませんが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。
 ちなみに、恥ずかしい話が苦手な方はすぐ本
 を閉じたほうが良いと思います。ええ、心からそう
 思います。
 では『どれみはなし』そのさん、どうぞご覧く
 ださいませ。

酒処金井亭亭主敬白

イラストレーション……久遠一海

「やったなあ、あいちゃん。それってさあ」

び、びっくりした。思わず一歩さがって

あれ？いまなに言ったんや？　そう思うてたら、坂の上から大っきな声が聞こえてきた

「どれみちゃんハリイ！ハリアップ！急いデ!!」

「え？あ、ちよつと、ももちゃん待ってえ！」

「なんや？なんや??ももちゃん、えらい急いでんなあ。どれみちゃんもペコペコあやまつてん。1組なんかあつたんかいな??」

わけわからへん、けど元気だけは少しもろたみたい

や。あたしはかばん持ち直して、教室に入ってた。

*** **

「おんぶちゃん、また寄っていくの?」

車の中のママにうなづいて、わたしはMAHO堂の中に入っていた。今日は朝からお仕事だから、その前にちよつとだけ。みんな学校なのはわかっている

んだけど、ね。

「おつはよ　あら、誰か来てるの?」

キッチンの方でカチャカチャ音がするし、なんとなくあつたかいし。

そう思っ見ていたら、キッチンの窓からひらひらと何かがのぞいてた。青い　パティシエ服!?

「え?あいちゃん??」

おかしいわ。あいちゃん、もう学校にいるはずなのに

「ロロロ?」

クッキーケースの脇から、ロロが飛び出してきた。

そういえば、けさは見かけなかったけど、MAHO堂来てたんだ。

「ロロ、ロツロ、ロロロロ」

え?あ、そつか。今日って　でもそれ、あいちゃん怒らないかな?　そつだ!

「わかつたわ。じゃ、お仕事終わったら来るから、わたしが来るまで待っててね」

5 あきのいちにち

「つづけて歌ってねえ。じゃ、さん、はい」

5 時間目。音楽の時間。西澤センセの、の〜んびりした声。

『し〜ずかあなあ し〜ずかな〜 里の秋〜』

口パクパクしながら、あたしはちらつと下を見た。きょう何べん目かもつわからへん。

『お〜背戸に木の葉の〜落ちるう夜は〜』

水晶玉はやつぱからつぽ。ミミはどこ行つてんやろ。こんな寒い中

「あ〜あッ！イラつくうッ!!!」

はあ、はあ、はあ。あ〜、声出したらちよつとは

楽なんな。あん？なんや静かやな

「せ、せのおさん？先生、なにかいけないこと、した？」

顔上げたら、目の前に先生がどアップンなうとつた。

「あ、いや、その」

「先生は、先生はっ、うううっ」

あかん、泣き出してしもたあ。

「センセ、かんにんや。ちいと腹立つこと思い出してしもつただけやん。な」

「やだ」

え？

「やだ。先生悲しいもの。お片づけしてくれなきやや〜だあ〜」

だあ〜、もおおッ!!

「あ〜、もうわあつた！掃除でもなんでもしたるから、な、な、泣きやんでえな」

もつ、泣きたいんは、こつちやあああ

バツ掃除も終わって、またかばんの水晶玉見て

ミミのやつ、とうとう戻って来いへんかった。まったくもっ〜

「あああああっ!! ええかげんにしいヤッ!!!」

「ど、どつしたの、あいちゃん? 朝からずつとじやない?」

ああ、あかん。掃除手^{てつど}伝うてくれたはづきちゃん、メガネずり落としてもつてん。

「ごめん。ごめんなあ。うん、実はな、ミミミが朝からおれへんねんやんかー」

そしたら、はづきちゃんきよとん、て顔して

「え? もしかしてミミミ、あいちゃんに言ってるの?」

なんやて?

「ミミなら、きのこの晩からMAHO堂にもつてるのよ。わたしつきり、あいちゃんには言ってるとばかり思ってたのに」

あんんのおアホ妖精! 人の気も知らんと、なにさらしてんねん!!

「ねえ、あいちゃん。そんな怒らないで、ね。ね」

学校からの帰り道。あたしはまっすぐMAHO堂へ歩いてつた。お腹にしがみついているはづきちゃんがいなくなったら走つてるとこや。

「いつくらはづきちゃんの頼みでもゆずれへん! なにがなんでも一発かましたらなあ!!」

階段おりて、CLOSEの看板横目で見ながらドア開ける。同時に、目えつぶつて思つきり

「くおおらあミミミ! このポケ妖精! とつとと出てこんかいッ!!」

息吸つて目開けたら、ももちゃんどれみちゃんが、ぼかーんとした顔で立つとつた。

「ええ!? なんだあいちゃんがもつ来てるの? はづきちゃん??」

「ごめん、なさい、わたしじゃ、とても、押さえられなくつてっ」

7 あきのいちにち

「どこかにいるはずや。あたり見渡したら、キッチンからひょい、っと顔出したんは あたし!!

思わずはづきちゃん振り切つて駆け出そうとしたあたしを、どれみちゃんが抱き止めた

「ちよ、ちよ、ちよとちよと ミ、ミミなんていないよ? これは そつ、これメカあいちゃんだよ!!」

目の前からうつつときた。あいかわらず、センスきつついわあ。

「氣いとりなおして、あたしに向かつてたあたしの目の前で、どれみちゃんが齒あ食いしばって大の字になつてん。」

「だめだよ、あいちゃん! ミミはさ、あいちゃんの誕生日にケーキあげたいからって、きのうからうつつと作つてたんだよ!?!」

11月14日。あたしの誕生日。テーブルの上のケーキには、11本のロウソク。そや。さつきMAHO堂に入つたときから

「ンなもん、見たらわかるわ!」

あかん、ミミ見たときからガマンしottaけど、もう、目の前が、にじんでまう。

「ケーキなんかより ミミがおつてくれる方がええ て、言わんとわからんか!?!」

にじんだ顔に、ちつちやな体が飛びついてきた。抱きしめたあたしの肩を、みんなが抱いてくれてん。

ああ、もう恥ずかしなあ。 でもええわ。 ミミがいてくれれば。

「もう始まつちやつてたの?」

どれみちゃんがぶつぶつ言いながら鳥手羽にかぶりついているころ、入り口からおんぶちゃんの声がした。

「ロウソク買つてきたけど、何本にする?」

「きよとん、とした。みんな一緒に。」

「え? やだなあ、おんぶちゃん。ロウソクなら

ちゃんと11本あるってば」

笑いながら話すどれみちゃんの横から、あたしの前におんぶちゃんの手が伸びてきた。ロウソク、3本持つて。

「あいちゃん、何本いる？」

「だから」

「なんや、あたしに目くばせしよんなあ。」

3本やて？3本いうたら ああ！

「3本！もらうてー！」

びっくりしたみんな顔見ながら、あたしはロウソク3本、ケーキの真ん中に刺した。おんぶちゃんが笑いながら、火いつけてくれてん。

「さ、ミミ。吹き消してや」

肩にいたミミを両手ですくって、ケーキのまん前に連れてくと、

「ミミ！」

ぷーっと風が吹いて、ちいぢな火が消えた。

「OH！ハッピーバースディね、ミミ！」

「ももちゃんがわかってくれた。そや。」

「誕生日もいっしょやで、ミミ！」

—おわり—

あきのいちにち のこと

11/14のあいちゃん's パースディ記念小話です。実はパースディを知ったのが三日前の11日、日曜日の夜。午前様生活の平日三日間で書き上げるという、我ながら無謀なことやってます。

こういう製作環境のため、いつもとは違った作り方になりました。とにかく頭に浮かんだセリフやらアイディアやら、片っ端から突っ込んでいって、『お話』になるようにバシバシ固める。この結果、アイディアが出るたびにお話が変わっていきました。3本の口ウソクに至っては、アイディアが出てきたのが14日の2時ごろで、仕事しながら筋書きを修正するという もうめちゃくちゃですね(^_^;)

おかげさまで、使わなかった伏線などもあつたりします。最後のセリフがなかなか決まらなかったもので、候補になりそうなものをあちこちばらまいておいたせいですが たとえば、なんで唐突に「里の秋」歌ってるのか、とか、なんでおんぷちゃんだけミミのケーキ作りを知らなかったのか、とか。いまさら書いてもしょうがないので、アイディアとして次回へ持越しです。来年も続くようですし、こんどはきちんと考えた話にしたいものです。

と言いつつ、また直前になって焦りそうな気はしますけどね。夏休みの宿題みたいに(-_-;)

ピーマン・だんす

カチャカチャカチャ　薄い黄色がボールの中で
 踊ってる。となりには振るった薄力粉に砂糖、ちょ
 ん、って押すと指がすうっと入ってくバター！

カチャカチャカチャ　よおし、OK。

「たまご泡立ったヨ」

わたしが声をかけたら、返事はMAHO堂の奥の
 ほうから返ってきた。

「ちょい待ちやあ、ももちゃん。ハナちゃんも〜ちよっ
 とでおねむ、やんな〜」

まだハナちゃんと遊んでたんだ。にんじんケーキ
 食べさせてあげるだけ、って言うってたのに。

「こおラ〜！みんな、おしごとおしごと〜！」
 遊びたいのはわかるけど、お菓子屋さんなんだか
 らちゃんとやらなきゃ。

「あ、あたし代わるよ。あいちゃん、手伝ってあげて」

「そうね。どれみちゃんよりあいちゃんのほうが、
 ケーキ生地まじ作るの上手なものね」

「ぶう！悪かったね。あたしはクッキーの方がとく
 いなの〜！」

あ〜あ、また楽しんじゃってる。しょうがないなあ、
 もつ。

「ちよつと！だれでもいいから手伝ってよオ!!」

「だって　」

「そのへんにんしとき。」

かんにんなあ、ももちゃん。いま行くで」

パタパタ、あいちゃんの足音が近くまで来たとき、

カランカラン

ドアベルが鳴って、だれか入ってきた。

「あ、すみません。いま準備中　　なんや、おんぷ
 ちゃんか」

ああ、おんぷちゃん来ちゃったら、またおしゃべ
 りはじめちゃうっつう。

わたしはあいちゃんをむかえに、キッチンを出た。
「もう、手伝わってパー！」

あれ？クッキーケースの向こうで、おんぶちゃんがぼつん、と立ってる。にっこり笑ってはいたけど、なんか元気なさそう。

「 どうしたノ？ 顔色わるいヨ」

あいちゃんも近くで、なんか声かけにくそう。

「うん。じつはね、あさつての土曜日『もぐもぐポン』に出演が決まったんだけど」

「『もぐもぐポン』？ きゃー！」

奥のほうから出てきたはづきちゃんの上から、どれみちゃんが飛び出してきた。

「あたし知ってる！ ゲストどうし、相手の好きな材料で料理作ってあげるんでしょ？ あたしだったら、そりやぜえったい」

「お肉選んだからってステーキとは限らないわよ、どれみちゃん」

あはは。はづきちゃん、つつこみきびしいわ。

「要するに、お料理番組でお料理作らなきゃいけないのネ」

こっくり。おんぶちゃん、考え込んだままでうなづいてる。

「でも、それでどうして？ おんぶちゃん料理苦手じゃないじゃない」

「材料が、ね」

「材料？」

4人でハモった。けど、まだおんぶちゃん、下向いてる。

「 そう」

「材料って、なに??」

「それが ピーマン、なの」

みんな、いつきのため息ついた。そっか、それなら落ち込むわよね。

「どうしても出たいの。デビューの時からあこがれてた先輩といっしょだから。でも」

「やめとき」

「え!？」

みんなが声の方を見た。あいちゃんが目をつぶって腕組みしてる。

「気絶しながら料理する気いかないな」

「さ、さわるだけなら大丈夫よ!」

「そんで? 味見もせんと、あこがれのひとに料理食わすつちゅうんか?」

あ、あ、そんなこと言ったら

ほら、おんぶちゃん、両手ぎゅっ、て握って、あいちゃんにらんでるよ。

「なによ! あいちゃんがそんな薄情はくじょうだなんて思わなかつたわ。あたし、帰る!!」

あ、あ、止めるひまもないじゃない。

「なにやつてルのよ」

あいちゃんは、だまってそのままキッチンに行っちゃった。

結局、そのあとあいちゃんは、ずっと沈んだ顔で

ケーキ作ってた。

けど帰るとき、ちっちゃくぼつん、って言ったの、わたしには聞こえてた。

「まあ、言うてしもたな」って。

家に帰ったあと、わたしはあいちゃんの家に行ってみた。

やっぱり気になる。どれみちゃんもはつきちゃんも、だいじょうぶ、って言うんだけど。

「だあ〜ッ! なんやこりゃ!!」

び、びっくりした。これ、あいちゃんのパパの声だ。

「なんやつて　夕ご飯に決まってるやん」

キッチンの窓からそーっと覗いてみたら、なんかテーブルの上がみどりいろだった。

「緑のプリンに、ケーキに　こんなんが夕飯かいな!？」

「あたしは！あたしは　ただピーマン食うて欲しいだけや」

うしろ姿しか見えないけど

「嫌いなもん、無理に食わせるんが目的かいな？」

「そやない！」

こんなに小さく見えるあいちゃん、はじめて。

「それにな、あいこ。俺が言つのもナンやけどな、こんなピーマンちゃうわ。そやないか？」

あいちゃん、ずっと下向いてだまつてる。

「もおええ。今日は外で食うわ。それ、ちゃんと片しや」

あいちゃんが顔上げたのは、あいちゃんのパパが出てっからだった。

「あれ、ももちゃん？」

「えへ。こんばんは」

目がはなせなくて、じつと窓からのぞいていたら、あいちゃんと目があつちやつた。

「あ　見られてしもたんかー」

「Sorryごめんね」

あたまかいて謝つたら、ちつちやなため息がひとつ、聞こえた。

「しゃあないわ。玄関から入り」

中に入ったわたしは、一直線にプリンをめざした。

みどり色のおもしろいプリン。あいちゃんがスプーン渡してくれたから、ひとくち　うん

「わりとおいしい。ハナちゃんに作ってあげようヨ」

「うん。ハナちゃんにはええんやけど　お父ちゃん言う通りや。こんなん、ピーマンやないわ」

あは　やっぱり、気になってたんだ。

「おんぶちゃんだネ。でも、だつたういつしよに考えてあげればいいノニ」

しばらく、あいちゃん下向いてだまつてて　大

きく息をすってから、静かに言った。

「なにがあっても、おんぶちゃんは泣かへんのや」

「え?」

「けどな、泣いてんのわかんねん。なみだなくても、声出さんでも、心のなかで泣いてんのわかるねん」

きょうのおんぶちゃん、わたしには、元氣ない、としか見えなかった。でもあいちゃんには、泣いてるように見えるんだ。

「あと二日や。いっしょに泣いててもじゃあないわ。おんぶちゃんには、はよ自分の弱いとこ氣い付いてくれへんと」

「だったら、それちゃんと話せばいいじゃない」

相手の気持ちも大事だけど、氣付いて欲しいならちゃんと言わなきゃダメなはず、だよな。

でも、あいちゃんは首を横に振ってた。

「あかん」

「なんで?」

「それが、おんぶちゃんだからや」

恥ずかしそうに、テしたように笑って言うあいちゃんを見てたら、わたしも反対したくなくなっちゃった。

「MAHO堂行こ、あいちゃん」

MAHO堂の看板はCLOSE。今日のハナちゃん係、はづきちゃんも帰っちゃったあと。

「あいちゃん、料理思いついた?」

「いくつかはな。それはええねんけど 材料どないしょ」

「そうネ」

言いながら二人でパーティシエ服に着替え。ずいぶん慣れちゃって、今じゃ話しながらでもできちゃう。先に着替え終わったわたしは、そのままキッチンへ。入ったとたん、目の前が、みどり。

「なんや、このピーマンの山は!?!」

あとから入ってきたあいちゃんが大声あげた。

「あ、来た来た」

ピーマンの影から出てきたのは ララ？

「明日はMAHO堂お休みよ。キッチンと、この材料みーんな使っていいわ」

「どないしたんや、これ？」

よく見ると、ピーマンだけじゃないわ。他の野菜やお肉、チーズにおトーフ 10人分くらい、なにか作れそう。

「ふふ いいから使いなさい。マジヨリカがお金出すなんてこと、めったにないんだから」

マジヨリカがお金を、っていうのもびっくりだけど、

「どうして」

そう、どうして、あいちゃんが戻ってくるの、わかったんだらう？

「どれみと、はづきちゃんよ。『あいちゃんは絶対キッチン借りに来る』って言うってね。マジヨリカおがみ倒しちゃったの。」

ああ、マジヨリカ探しても無駄よ。明日までハナ

ちゃんのめんどろ見てるから」

奥のほうに行こうとしてたあいちゃんが、振り向いて、ペこっておじぎ。

「マジヨリカに伝えたってな。『おおきに』って」

ララが笑って、

「それじゃミミ、ニニ、手分けしてレシピ日記で調べましょ。あたしも手伝うわ」

「あ、ああ、それはええねん」

「え？」

ララが振り返った。わたしもわからない。てっきり、使えそうなレシピを探すのかと思っただのに。

「あれはハナちゃんや。他に使うたらあかん」

「せっかくあるのに、使わないノもつたいナイ！」わたしの横で、ララがうなづいてる。そのうしろから、ミミとニニがレシピ日記持ってきた。

「ミミ。なんや？」

「ミミ。なんや？」

ミミがあいちゃんに飛んでいって、インカムにドンドン体当たりしてる。

「ミミもレシビ日記使え言っんか」

あいちゃん、ミミを両手でそっと抱えてから、わたしたちみんなを見回して、

「みんな、おおきに。せやけど」

言いながら、ミミを目の前に持ってきた。

「せやけどあたしはな、自分で作りたいんや」

言いたいこと、わかる。けど二日しかない、って言ったの、あいちゃんだよ。

なんて声かけようか考えてたら、じつと聞いてたララが、とつぜん、

「あ〜ん、また負けちゃったわね〜」

って残念そうに言った。なに？

「はい、これ」

テーブルの下から、ララがメモ取り出した。

「きつとそう言うから、って。はづきちゃんよ。おんぶちゃんのよく食べるものとか、他に嫌いなものとか、いろいろ書いてあるわ」

あいちゃん、ぼーっとしてる。手の中のミミが代

わりにメモ受け取って目の前で見せても、やっぱり、ぼ〜っと。

ちがう。嬉しいんだ。わたしにも、あいちゃん

んの心の中、わかる。

「これも使わない、な〜んて言ったら、わたしも承知しないわよ」

「あ〜、もう!! あかん。ぜんぜんダメや」

二階にハナちゃんの様子を見に行つてから降りてきたら、ピーマンの山の中、あいちゃんが突っ伏してた。

「どうしたノ？」

「ああ、もちちゃんか。いま、なに作るか考えてたんやけどな。

はづきちゃんのメモとかも使って、料理のアイディアはいくつかできたんやけど、それでほんとにえ

えんか、わからへんねや」

そっか。わたしたちがおいしくても、しょうがないんだっけ。

「うん。せつかく作っても、おんぶちゃん食べられなかったら意味ないネ」

「やっぱあたしがピーマン好きやからかな」

わたしも、ピーマン嫌いじゃないから、よくわからないし

「ピーマン嫌い、って、どこが嫌いなのカナ？」

「うーん 大阪でピーマン嫌いやった子おは、匂いがイヤや言うてたな」

「匂い？」

「そや。青くさいんがイヤやて」

テーブルの上のピーマンひとつ取って、匂いをかいでみた。うーん。

「なんとなくなら匂うけど、これ？」

あいちゃんはずで組みしながら、こっくりうなづいてた。

「あたしらには平気なんやけどなあ」

そっだよね。でも魔法でおんぶちゃんになっても、ピーマン嫌いになるわけじゃないし あ、そっか。

「だったら」

両手をパンパン、っと叩いて

「ええ？ ももちゃん、なに替えてんねん!？」

ピーマンに向けて、ポロンを振り回して！

「ペルウタン・ペットン ピーマンよ、思いつき

り青くさく、なアレ!!」

ポフッ

まわりが全部みどりになって、消えた。けど

「げーなんやこの匂いは!!」

わたしはちよつと声出せなかった。青くさい、ってこんなのだったっけ!？」

「気持ち、わるイイ」

「こあら、いくらあたしでも、かなんわあ」
思わずキッチン飛び出して、何度か大きく息を吸

い込んで。はあ、もうイヤになりそう。でも、これでおくわかった。

「これが、おんぶちゃんが感じてる『ピーマン』なんだ」

振り返ったら、あいちゃん、まだキッチンで匂いかいでた。目をつぶって。

「やったる」

え、なに？

「やったるわ。見とれよ、この匂いあしたの放課後までに全部消したる!!」

握りこぶしでテーブルばんつ、て叩いてるあいちゃん見てたら、またあの匂いが攻めてきた。思わず、窓をあけてみたら

「あれ、おんぶちゃん?」

窓にべったりくっついてたあの髪型が、ささつ、と消えた。

「あいちゃん、わたしちょっと出てくるウ」

「ああ、遅いからきょうはもうええで。またあし

たな」

あいちゃんがこつち向かずに手を振ってるのを見て、わたしはMAHO堂を飛び出してった。

「待つテ、おんぶちゃん!」

MAHO堂からおんぶちゃんの家への通り道。小さな公園のわきでなんとか追いついた。はあ、けっこう足速いんだ。

「あいちゃん、頑張ってるヨ。おんぶちゃんも、いっしょ頑張ろ?」

そうしたらおんぶちゃん、笑いながらくるって振り向いた。

「あいちゃんが頑張ってるなら、わたしのやることは決まってるわ」

「What?」

「わたしは、わたしにしかできないことをするの。」

あいちゃんの言つとおりよ。いくらおいしい料理のレシピがあっても、わたしが料理できなかったら、なにんもならないもの」

あ、おんぶちゃん、泣いてる。

あいちゃんの言つてた通りだわ。わたしにもわかった。おんぶちゃんは、なみだ見せないで泣くんだけ。

「だいじょうぶ。レシピは絶対できるから。わたしはただ、ピーマンをさわれるようになればいいだけ。それじゃ、あしたね」

そう言っておんぶちゃん、また駆け足で帰っていった。

きつとうまくいく。あたしは、そう思った。

「あしたの帰り、MAHO堂に来テ！きつと、きつとあいちゃん待ってるカラ!!」

手を振ってるおんぶちゃん、もつ泣いてない。顔は変わってないけど、わたしにはわかった。

「おんぶちゃん来たヨオ」

金曜日の放課後、MAHO堂。あいちゃんはミミに学校行ってもらって、ずっとこもってみたい。

「わたしに見せたいものって、なに?」

おんぶちゃんが厳しい顔であいちゃん見てる。どれみちゃんとはづきちゃんが、緊張した顔で見守ってる。けど、わたしはちよつと笑っちゃった。

だっておんぶちゃん、ノート持って一直線にキッチンに行くんだもん。あいちゃん、まだなんにも言っていないのに。

あいちゃんはおんぶちゃんの後からキッチンに入っで、クッキングストープの前でくるっと振り向いた。

「さあて、これから実演したるから、よう見て覚えるんやで」

ストープの上には、あつためたフライパン。近くには、きざんだり中くりぬいたりしたピーマンが置

いてある。

「いいわよ」

「まずは洋食。『肉つめピーマンのトマトソースがけ』や。ええか、ピーマンちゅうんは火い通すと甘くなんのや。せやから、塩きかせて引き立たせるんが基本や」

おんぶちゃんはだまっとうなづいてる。目はあいちちゃんの手元をじっと見て。

「この場合はトマトがすっぱ味あるから、塩はちょいおさえてるけどな。ほい、上がりー」

テーブルに、赤いソースのかかったピーマンが置かれた。おんぶちゃんはナイフでひと口分切って、ぱく。

「あ、おんぶちゃん、食べてる」

どれみちゃんが、ぼーっとした声で言った。わたしも、気が付かないうちにこぶしを握ってた。みんな『がんばれ』って言ってる。心の中で。

「うん。わかった」

「続いて中華。『細切りピーマンと牛肉炒め』なんやけど。どわー！」

いきなり目の前を通り過ぎていったのは、どれみちゃん！

「牛肉！ぎゅうにくうー あれ？」

ボウルの中身見て、どれみちゃんが首かしげてる。

「なんやけど、って言うたやんか。いらちやなあ。ほんまは牛肉使っつんやけどな、ないから今日は豚肉や」

ためいきつきながら戻ってきたどれみちゃんの頭を、はづきちゃんがぼんぼん、つてたたいてる。

「しゃあないなあ。まあええ、続きいくで。」

ピーマンのええとこはもう一つ。パリツとした歯ごたえや。これなくしたらピーマン食べる意味あらへん。そやから

おんぶちゃん、真剣だわ。なんにも見落とさないように、しっかりと目開いてる。

「ほい、これで二つやな」

おんぶちゃん、ピーマンとお肉をぱくぱく口の中

に入れて　ちよつと口すぼめちゃったけど、それでも食べてた。

「おんぶちゃん、食べてる。食べてるよ!!」

「うん　うん♡」

どれみちゃん、はづきちゃん。ふたりともほんとは嬉しそう。そうだね。みんな信じてたもんね。

「最後は和食。』ピーマンのから揚げ』や」

「え!?!」

「つめたくく冷やしたピーマンに、香りつきのカタクリ粉つけて揚げるんやけどな」

まわりの空気が止まった。あいちゃんだけがひとり動いてる。だって　だってそれって!

「そ、それって　ただピーマン揚げただけ!?!」

「『だけ』言うけどな、ピーマンちゅうのは皮のほう揚げると、すうくしわくちゅんになってまうんや。

せやから一つつつ善でつまんで、中のほうだけじっくり揚げる。皮のほうは途中でちよつとだけ油かけて　ほい、出来上がりや」

目の前に出てきたお皿。キッチンペーパーの上のピーマンを見ながら、おんぶちゃんが息をのんでる。

「さあ、食べ」

「た、食べてあげるわよ」

目を閉じて、思いっきり口を開いてピーマン放り込んで　2回かんだところで、ぱつと顔が明るくなった。

「　おいしい」

「そやる?中はあまくて、まわりはパリッ!これがほんまのピーマンや。香りづけに使ったもんはあとで教えたるわ」

すぐい、あいちゃん。本当にピーマン食べさせちゃった。どれみちゃんたちなんか、もう抱きあつて喜んでる。

「あ、そつか:『魔法のもと』使ったんでしょ?」

あ、おんぶちゃんが目が、いつもみたにいたずらっぽくなってる。
「使ってへんよ」

「使ってるわよ。ただピーマン揚げただけでこんなにおいしくなるなんて、変だもの」

ああ、せつかくいい感じになってたのにい〜。

「使ってへんてー！だれがそんなもん使つかいな」

あ、おんぶちゃん、ちょっとむっとしてる。

「なによ、あいちゃんてそんな人だったの？はつきり言えばいいのに」

「ええかげんにしいや！使ってへん言ったら使ってへん！」

「使ってる!!」

テーブルごしに、二人の顔がだんだん近づいてる。

「使ってへん!!あたしが使ったんは」

ちゅっ

「これだけや」

わあ♡おんぶちゃんの鼻にちよん、ってキスして、あいちゃんそのままストープの前に逃げちゃった。

「くちびる、入れたの？」

けど、むくわれないわ。あいちゃん、ストープの前で脱力しちゃってるじゃない。

「ええわ。もっかい作つたる あちっ!!」

ああ！油がうではねちゃってる！わたしがぬれたふきんを持って、あいちゃんのを拭こうとしたら、

「ああ、だいじょぶだいじょぶ」

って言って追い返されちゃった。あいちゃん、箸を離したくなかつたみたい。

よく見たら、あいちゃんので、ちゅちゅな

やけどがいつぱい!!

「つめた〜いピーマン揚げるし、油ハネるんはしゃあないやん。せやから、これはおまげや。テレビなんかでやったらあかんで」

揚げ終わったあいちゃんが、さっきのやけどのあとを拭いてるあいだ、おんぶちゃんは、ただじっとあいちゃんのをを見てた。

「みんな急いデ、始まつちゃうヨー！」

土曜日、わたしたちは学校から直接MAHO堂に直行した。

もちろん、お目当てはおんぶちゃんの出てる『もぐもぐボン』。

「マジヨリカ、テレビ、テレビ!!」

「遅いぞおまえら。おんぶはもう二品も作りおわつとるわい」

たぶん魔法で出したと思う大きなテレビの前で、マジヨリカがチリトリに乗ってる。

「なあんや。ほな、もう見ることあらへん。さ、しごとしごと」

そう言いながら、あいちゃんが着替え始めた。

「待って おんぶちゃん、まだ作るみたいよ」

「え?でも、『もぐもぐボン』で作る料理って二つじゃ

「しっ!」

テレビの中のおんぶちゃんは、もうひとりのゲストにペこつ、て頭を下げてた。

『ほんとはこれで終わりだけデ、もう一つ、作らせてください』

「なんや?作れるようになったから言つて調子に乗つて、失敗しても知らんで」

後ろでパティシエ服に着替えおわつたあいちゃんの声がした。テレビの中では、冷蔵庫からお皿取り出してる。

『つめたく冷やしたピーマンに、『コロモを薄くつけて』

がばつ、と音がしそつなくらいの勢いで、あいちゃんが振り返つた。

「なんやて!?!」

「ワオ!まさか!」

あいちゃんそのまま、わたしの背中に飛びついてきた。けど、わたしもそんなの気にしてられない。ま

さか、あいちゃんだつて失敗したのに

『 高温の油で、中のほうだけじゅくり揚げるの。

あちー！』

油がはねて、おんぶちゃんの腕が赤くなった。

「ああー！！」

飛び出してつたあいちゃん、テレビに貼りついちゃってる。

「あいちゃん、見えないって」

「ごめん。せやけど」

むっつ、とじてるどれみちゃんを見て、あいちゃんはイスに座りなおした。

テレビの中のおんぶちゃんは、舌を出して笑ってる。箸はまだピーマンを油に浮かべたまんま。熱くても、離さなかつたんだ。

『ハネちゃった。えへへ みんなはもつと気をつけてね』

「そやから、やめ、言ったんに」

机の上で頭かかえてるあいちゃんを、わたしはぼ

んぼん、つてなでてあげた。

テレビでは揚げ終わったおんぶちゃんのところへ、司会者の人がマイク持つてきてる。

『おんぶちゃん、大丈夫ですか？』

『ええ、このくらい えへ』

ダンツッ！ って、すごい音がした。あいちゃんがテーブルなぐりつけてる。

「『えへ』やないやろ！！なんであたしの言ったことが！！」

『実はこの料理、あたしが考えたんじゃないんです。考えてくれた人のやけどは、もつと、ずっと多かつた』

だから、わたしも平気です♡』

あいちゃんは、しばらくじゅつとテレビのなかのおんぶちゃんを見つめてたけど、

「あほやなあ」

ぼつん、と言つてそのままMAHO堂から出ていった。着替えもしないで。

「あ、あいちゃん？」

思わず追いかげようとしたわたしの前に、どれみちゃんがいた。

「ひとりにしといてあげよ」

「そうそう。あいちゃんって、すっごいテレ屋さんなんだから」

はづきちゃんも、後ろからわたしの肩に手を置いてた。そっか、きつとあいちゃん

「嬉しくて、泣きそう？」

二人とも、にっこりうなずいてる。わたしは、それが嬉しかった。

「あれ、あいちゃんいないの？」

少したってから、おんぶちゃんが入ってきた。平気な顔してるけど、ほっぺたのはしっこに汗かいてる。きつと走ってきたんだ。

「あいちゃん、さっき出てったヨ。まだ追いツク」

「別にいいのよ。どう、ちゃんとできたでしょ」

そんな残念そうな顔して言われても、ねえ。みんな、くすくす笑ってるし。

「そっだね。おんぶちゃん、もうピーマン好きになっただでしょ？」

「わたし？ううん、嫌いよ。ピーマンなんてみんな、こらえてる。吹き出す前に言わなきゃ。」

「あいちゃんのピーマン以外は、でシヨ♡」
大爆笑のなか、真っ赤な顔が舌を出してた。

—おわり—

ピーマン・だんす のこと

なんというか 我ながらここまで暴走するとは予想外でしたが(^_^;)

この本の $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ ソース(あるいはHTMLソース)をごらんの方にはおわかりかと思いますが、最初のコメントにこう書いてあります。

砂吐く程度の甘さで済まさない。

ベタ甘・ゲロ甘の自己限界に挑戦すること！

結果として、この目標は達成したと思います。これ以上書くと、ちょっと危険です。

4冊目のどれみ本を作るときには、さらに恥ずかしさをアップさせないといけないのかなぁと思うと、頭が痛いですね。 それでも、やっちやいそうな気はしますけど(^_^;)

最後に『ピーマン・だんす』というタイトルですが、今ではもう意味がないかもしれません。実は、考えついたときはピーマン踊^{おど}らせていたのです。ももちゃんが魔法で踊らせてて、それをあい・おんが見てる、っていう絵。これがこの話の始まりでした。

ところが、書いてみたらまるっきり違う話に(-_-;) でももうタイトル考えてる時間がない！ というわけです。今後、聞かれるたびに説明しなくちゃいけません、まあいかがんさのバツということで、反省しましょう。

あとがき

はい、どれみ本3冊目です。期せずして「あいちゃん本」になってしまいました(^_^;)

色々なところで公言しておりますが、おジャ魔女の中で私が一番好きなのは あいちゃんです。

「どれみ」を見始めたのは無印の最後近くでした。普通の魔法少女ものかなあ、と思いながら見ていたのですが、最終話、水晶玉を取り上げられるところで印象はガラッと変わりました。

「魔女ではなくなった」と聞かされて、がっかりとした、あるいは申し訳なさそうな顔の中でただ一人毅然^{きぜん}としていた彼女。

「ええんや。あたしは何も間違^{なんまちご}うたことしてへん！」

と、声が聞こえてきそうな表情に惚れました。

ええ子やあ～(T_T)

だから、あいちゃんのセリフ考えるのは難しいです。気をぬくとすぐ「変な大阪弁の女の子」になってしまいます。(私は生粋^{きっすい}の関東人ですから(-_-;)) 一つのセリフを3回は書き直しているでしょうが それでもいつも「もうちょっと、なんとかならんかな～」と思います。

もっと修練を積んで、「あいちゃんらしいあいちゃん」にしないといけませんね。頑張りましょう。

では最後に、この本を手にした(手にしてしまっただ方も含めて) すべての方に感謝の意を表しつつ、この拙文を終わらせていただきます。